

震災前後の山古志地区の営農の状況と仮設住宅での農作業の実態

プロジェクト2 研究員
東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科
教授 内田 雄造
プロジェクト2 研究協力者
奈良県立大学地域創造学部
講師 古山 周太郎
東京工業大学社会理工学研究科
特別研究員 清野 隆

I. はじめに

1. 背景と目的

2007年12月、山古志地区の住民が足かけ3年間暮らした仮設住宅が閉じられた。全村避難を経て、ようやく集落に住民が戻り、生まれ育った場所で、それぞれの生活を再びはじめたところである。震災復旧事業により生活インフラは整備されたが、震災以前のひとびとの生活の営みは、簡単に回復できるものではない。さらに、震災による環境の変化、住民の高齢化や人口減少などの現象は、暮らしの基盤となる、農に関する営みの姿にも影響を与えている。

中越地震は、山古志地区に甚大な被害をもたらし、大規模な地滑りや、斜面崩落を数多く引き起こした。地面や地盤の崩壊は、集落の空間自体を大きく変容させ、住宅とともに、棚田などの農地にも被害の爪痕を残した。震災復旧事業により、農地も原状回復が目指されたが、水脈の変化や、崩落による地盤の消失により、回復不能となった農地も多い。さらに、震災後は集落移転により農地との距離が遠くなってしまったケースもある。一方、震災によって全村避難を余儀なくされた、山古志地区の住民は、仮設住宅においても農に関する営みを忘れずに続けていた。山から一時的に降りてきた人たちが、仮設暮らしという状況の下、農作業に関わりながら苦しい状況を乗り切ったのである。

本研究では、以上の背景を受け、まず震災前後の営農に関する実態把握により、震災が山古志の農業に与えた影響を明らかにすることを目的とする。さらに、

仮設住宅における農作業の実態把握と、農に関する営みが仮設住宅での暮らしにどのような影響を与えたのかについても明らかにする。最後に、以上の結果を踏まえて、今後の山古志地区における営農のありかたの一端を考察してみたい。

2. 調査概要

本調査の概要は、以下のとおりである。【表1】アンケートの配布と回収は、長岡市山古志支所の多大なる協力のもとに行った。また、山古志地区外へ転出した人については、郵送配布郵送回収を行った。

調査項目は、各プロジェクトチームが作成しており、本報告では、営農と仮設住宅での農作業関連の質問項目の集計結果をもとに分析をおこなっている。

表1 調査の概要

項目	概要
調査時期	2008年3月17日～4月3日
調査対象	・山古志地区に帰村した世帯と震災後に山古志地区から出た世帯
回収状況	・山古志地区内：457配布 195回収（42.7%） ・山古志地区外：225配布 60回収（27.3%）
配布・回収方法	・山古志地区内：支所から集落の区長に質問票配布。区長が手渡し回収または支所への直接手渡し回収 ・山古志地区外：郵送配布郵送回収
調査項目	①世帯の状況 ②帰村、住宅改修の状況 ③営農の状況 ④仮設での暮らし状況 ⑤文化、風習 ⑥介護や生活ケア

II. 調査対象の概要

本章では、調査対象となった世帯の状況と、震災による被害状況、仮設住宅での暮らしの実態についての調査結果をまとめる。

世帯の状況では、産業や農業の継続に大きく影響すると考えられる、世帯構成、世帯人数や65歳以上の高齢者のみの世帯に関しても着目する。さらに、震災前後における居住地の移転の状況も明らかにする。山古志地区では、多くの世帯で住宅被害を被ったが、居住地が移転した場合には、農業や産業の継続自体が困難になると予想される。震災被害の状況は、おもに住宅の被害状況と、農地の被害状況をまとめる。

最後に、仮設住宅の利用の有無と利用期間を中心に明らかにする。山古志地区は全村避難を敢行したが、帰村時期は集落ごとの被害状況などにより異なり、また、仮設住宅を利用せずに親戚のもとに身を寄せた世帯もある。次々章で、仮設住宅での農作業の実態を扱うが、その前提として、仮設住宅の利用状況について簡単に触れる。

1. 調査対象の世帯の状況

1) 世帯の構成

調査結果を、国民生活基礎調査の世帯分類に基づき分類した。さらに、単身世帯、夫婦のみの世帯、その他の世帯については、すべての世帯構成員が65歳以上の世帯を高齢者世帯とし、その数と割合を示している。

【表2】

表2 世帯構成別の数と割合

	世帯数		うち高齢者世帯	
	数	割合	数	割合
単身世帯	40	15.7%	32	80.0%
夫婦のみ世帯	83	32.5%	58	69.9%
夫婦と未婚の子供のみ世帯	42	16.5%	-	-
夫婦とひとり親世帯	12	4.7%	-	-
三世帯世帯以上	43	16.9%	-	-
その他	25	9.8%	2	8.0%
不明	10	3.9%	-	-
総計	255	100.0%	92	36.1%

結果をみると単身世帯が全体の15.7%、夫婦のみの世帯が32.5%と、合わせて48.2%であった。これらのタイプの高齢者世帯数をみると、単身世帯が32世帯、夫婦のみの高齢者世帯が58世帯であり、単身世帯と夫婦のみの世帯は、世帯人数が少なくまた高齢者の割合も高いことから、農業の継続等について不安を抱えている可能性が強い。反対に、3世代以上の世帯も43世帯あり、このタイプの世帯の平均人員は5.72人で、産業の担い手として期待できるといえるだろう。

2) 居住地の変化

震災前後での居住場所の変化の状況を把握した。震災前から移住した場合は、移住先ごとの回答数と割合を示してある。【表3】

表をみると全体の65.1%は震災以前と居住地に変化がないとしている。震災を機に、居住地に変化あった場合は、古志地区以外の長岡市内へ移住したケースが47件といちばん多く、山古志地区内での居住地の変化があったのは27件であった。また新潟県内への移住や、県外に移住するケースも少ないながらみられた。

表3 居住地の変化の状況

	数	割合
居住地の変化なし	166	65.1%
山古志地区内へ移住	27	10.6%
長岡市（山古志地区以外）へ移住	47	18.4%
長岡市以外の新潟県内へ移住	8	3.1%
新潟県外へ移住	3	1.2%
不明	4	1.6%
全体	255	100.0%

2. 震災による被害

1) 住宅、その他の施設の被害状況

震災による住宅、納屋、車庫の被害状況をまとめた。【表4】なお、表内の回答割合は、全回答数255から、不明・未記入の回答数を除いた数を母数としている。

住宅の被害状況をみると、回答者のすべてがなんらかの被害を受けており、全壊との回答が44.2%であり、大規模半壊の8.4%を加えると、半数の世帯で甚大な被害を受けたことがわかる。また納屋についても、半数の世帯で甚大な被害となっており、車庫は一部損壊が32.8%、被害なしとの回答も10.7%であった。

震災後に居住地の変化がなかった世帯と、山古志地区内での居住地変化があった世帯の合計193世帯について、住宅の改修と新築の状況をまとめた。【表5】住宅改修が必要のなかったケースは16件のみで、123件で改修を実施している。また同じ土地に新築したとの回答も26件あった。公営住宅へ入居したとの回答も5件みられた。

表4 住宅と施設の被害

	住宅		納屋		車庫	
	数	割合	数	割合	数	割合
全壊	111	44.2%	46	43.8%	43	35.2%
大規模半壊	21	8.4%	11	10.5%	9	7.4%
半壊	75	29.9%	23	21.9%	17	13.9%
一部損壊	44	17.5%	18	17.1%	40	32.8%
被害なし	0	0.0%	7	6.7%	13	10.7%
不明・未記入	4		150		133	
総計	255(251)		255(105)		255(122)	

※総計欄の括弧内は全体から不明・未記入を除いた数字

表5 住宅改修の状況

	数	割合
住宅を改修した	123	63.7%
住宅を改修していない	16	8.3%
同じ土地に新築した	26	13.5%
違う土地に新築した	18	9.3%
公営住宅へ入居した	5	2.6%
その他	5	2.6%
総計	193	100.0%

農地と養鯉池の被害状況をまとめた。【表6】農地については、未記入を除く76.5%が大規模な被害があったとしている。被害がないとの回答は3件であり、ほぼ全ての農地が、なんらかの被害をうけていることがみてとれる。また養鯉池についても、未記入を除くと85.2%が大規模な被害にあっていることがわかる。

表6 農地等の被害

	農地		養鯉池	
	数	割合	数	割合
大規模な被害	143	56.1%(76.5)	92	36.1%(85.2)
小規模な被害	41	16.1%(21.9)	14	5.5%(13.0)
被害なし	3	1.2%(1.6)	2	0.8%(1.9)
未記入	68	26.7%	147	57.6%
全体	255	100.0%	255	100.0%

※割合の括弧内は全体から未記入を除いた数を母数とする割合

3. 仮設住宅での暮らし

仮設住宅の利用の有無と、集落ごとの居住期間をまとめた。【表7、8】全体の84.7%が仮設住宅を利用したと回答しており、親族宅で暮らしていたのはわずか11件であった。また、仮設住宅の居住期間では1～2年間で102件と一番多く、次いで2～3年間という回答が多かった。1年未満の回答も14件みられた。

集落別にみると、虫亀、種苧原、竹沢の集落は1年未満のケースも見られるが、大部分が1～2年の入居期間であった。一方、東竹沢は植木といった集落は2年以上の入居が半数以上を占めている。

表7 帰村までの生活場所

	数	割合
仮設住宅	216	84.7%
親族宅	11	4.3%
その他	8	3.1%
未回答	20	7.8%
全体	255	100.0%

表8 集落別にみる仮設住宅で暮らした期間

集落	1年未満	1～2年	2～3年	合計
虫亀	4	36	4	48
種苧原	4	36	8	52
竹沢	5	21	12	40
東竹沢	0	4	9	15
植木	0	1	13	15
小松倉	0	1	0	1
不明	1	1	1	3
旧村外	0	2	2	4
全体	14	102	49	178

Ⅲ. 営農の状況

ここでは、まず、震災以前の営農の状況を把握した後、現在の実態と比較することで、震災による農を取り巻く環境の変化が、営農の継続に与えた影響をみていきたい。同時に、現在の営農に関する課題を整理し、営農をやめてしまった理由についてもまとめる。本稿では、営農を広義の意味で捉えており、自家消費・自給を目的とする、現金収入のない場合も営農に含めている。なお、営農に関する設問には、未回答や不明な回答数が多かった。これは、質問項目の設定段階での内容の吟味不足等の問題と同時に、回答者が今後の営農継続を決めかねているといった調査時期の問題や、農業関係のデータを正確に把握していないことが影響しているのではないかと考えられる。

1. 震災以前の営農の状況

震災以前は、71.0%のひとがなんらかのかたちで営農に関わっていた。【表9】次に営農の実態として、米と野菜に関する作付面積をまとめた。【表10】まず、米をみると全体の平均は35.9アールで、作付面積が20アール以下の比較的小規模なケースが全体の4割以上を占めていた。反対に、101アール以上との回答が10件あり、農家によっては大規模に営農しているところもみられる。野菜の作付面積をみると、全体平均が8.2アールであり、米と比較すると1軒あたりの作付面積は小さい。また、5アール以下のかなり小規模な作付面積が半数以上であった。

表9 営農の有無

	数	割合
営農経験あり	181	71.0%
営農経験なし	35	13.7%
無回答・不明	39	15.3%
全体	255	100.0%

表10 作付面積別の数と割合

米			野菜		
作付面積 (アール)	数	割合	作付面積 (アール)	数	割合
1~20	58	42.0%	1~5	67	56.8%
21~40	39	28.3%	6~10	32	27.1%
41~60	18	13.0%	11~20	11	9.3%
61~100	13	9.4%	21~	8	6.8%
101以上	10	7.2%			
全体	138	100%	全体	118	100%
平均作付面積	35.9アール		平均作付面積	8.2アール	

2. 震災後の営農の状況

1) 営農の継続について

現在営農している、もしくは今後営農するつもりか否かについて、世帯構成別にみた結果を示す。【表11】

全体の43.1%が“営農継続する”と回答し、45件(17.6%)のひとが“営農継続しない”と回答した。世帯ごとに見ると、単身世帯や夫婦のみの世帯が、“営農継続する”との回答が4割以下なのに対し、三世代世帯以上と夫婦とひとり親世帯は6割を超えており、世帯の人数が多いほうが営農を継続する傾向がみられる。また、“営農継続しない”との回答では夫婦のみの世帯と、夫婦と未婚の子供のみ世帯が2割以上との結果がみられた。総じて、世帯の構成によって営農継続に差がみられた。

表11 営農継続の状況世帯構成

	営農継続する		営農継続しない		無回答	
	数	割合	数	割合	数	割合
単身世帯	12	30.0%	7	17.5%	21	52.5%
夫婦のみ世帯	30	36.1%	17	20.5%	36	43.4%
夫婦と未婚の子供のみ世帯	19	45.2%	9	21.4%	14	33.3%
夫婦とひとり親世帯	8	66.7%	2	16.7%	2	16.7%
三世代世帯以上	28	65.1%	4	9.3%	11	25.6%
その他	12	48.0%	4	16.0%	9	36.0%
不明	1	10.0%	2	20.0%	7	70.0%
全体	110	43.1%	45	17.6%	100	39.2%

2) 作付面積とその変化

米と野菜の震災後の作付面積（予定も含む）をまとめた。また震災以前の作付面積と比較し、面積の増減についても示している。【表12、13】

まず、米の作付面積別の割合をみると20アール以下の小規模な形態での営農が32件で、回答者の40.0%を占めている。また101アール以上の作付面積の農家も9件みられた。平均は44.0アールであったが、これは震災前よりも若干ながら増加している。震災以前との作付面積を比較すると、半数以上が変わらなかった。減らした農家は22件だが、その一方で、増やした農家も15件みられた。

次に、野菜の作付面積別の割合をみると、5アール以下が回答者の半数以上を占めている。全体の平均は9.2アールであり、米と同様に1軒あたりの作付面積は増えている。野菜についても6割以上が作付面積の変化がみられないが、増やすとの回答が19件みられた。

表 12 米の作付面積と変化

米の作付面積			震災以前からの作付面積の変化		
面積(アール)	数	割合		数	割合
1~20	32	40.0%	減らす	22	27.5%
21~40	19	23.8%	変わらない	43	53.8%
41~60	13	16.3%	増やす	15	18.8%
61~100	7	8.8%			
101~	9	11.3%			
全体	80	100.0%	全体	80	100.0%
平均作付面積 44.0 アール					

表 13 野菜の作付面積と震災以前からの変化

野菜の作付面積			震災以前からの作付面積の変化		
作付面積	数	割合		数	割合
1~5 アール	41	52.6%	減らす	12	15.4%
6~10 アール	21	26.9%	変わらない	47	60.3%
11~20 アール	8	10.3%	増やす	19	24.4%
21 アール~	8	10.3%			
全体	78	100.0%	全体	78	100%
平均作付面積 9.2 アール					

3) 営農をやめた理由

営農をやめた理由について複数回答で答えてもらった。【表14】結果をみると、“体力的につらいため”との理由が一番にあげられた。高齢になるにつれ農作業自体の負担感が強まるのが、営農をやめる大きな理由となっている。3番目に多かった理由である“耕すひとがいないため”との意見にも、人口減少による耕作の担い手不足の問題があらわれている。一方、2番目に多く挙げられた“被災前と田や畑の状況が変わったため”との理由からは、震災によって、農業を取り巻く物理的な環境が変化した点も営農をやめた大きな原因となっていることがうかがえる。一方で“耕す意欲がわからない”や“経済的な問題”などの理由はそれぞれ5件、4件と少なかった。

表 14 営農をやめた理由

理由（複数回答）	数	割合
耕すひとがいないため	20	44.4%
体力的につらいため	32	71.1%
田や畑が自宅から遠い	8	17.8%
耕す意欲がわからないため	5	11.1%
経済的な問題があるため	4	8.9%
他の仕事がいそがしいため	2	4.4%
被災前と田や畑の状況が変わったため	23	51.1%
その他	8	17.8%
全体（営農しないとの回答数）	45	100.0%

4) 営農に関する課題（自由意見）

営農に関する課題についての自由意見をまとめた。【表15】項目としては、“高齢化の問題”、“後継者の不足”、“農業に関する環境の問題”等の現在の中山間地域が抱える共通的な課題がみられた。具体的には「高齢のため、何年できるかわからない」との意見や、「米が安いので割にあわない」といった現状に問題を感じている。“地震による耕作環境の変化”といった震災に生じた問題では、おもに「田が完全に修復できていない」などの

表 15 営農に関する課題 (自由意見)

営農についての課題 (回答数)	具体的な内容
高齢化の問題 (7)	・高齢のため、何年できるかわからない ・数年後は営農ができなくなる ・高齢化が進み、後継者の減少で将来が心配 ・いつまで続くかわからないが自分で食べる分の野菜は作りたい。など
後継者の不足 (3)	・過疎地域への対策を検討してほしい ・耕作する人が減ってきている ・収入が確定できないので後継者が受け継がない
農業に関する環境の問題 (4)	・米が安いので割にあわない ・米の販売価格が安くなっている
耕作の共同化の必要 (5)	・援農の組織が必要 ・共同でもいので農機具がほしい。 ・畑を耕すのが大変なのでサポートしてくれる組織が必要 など
地震による耕作環境の変化 (10)	・元の畑に戻すのに時間がかかる ・農業用水不足 ・田畑が自宅から遠くなって、水の確保が未定 ・山から水が出ないので、田んぼの作付けができない ・田がまだ完全に修復できていない。など
補助金や援助が必要 (5)	・機械等の購入に対し助成等があったらいい。 ・地域の実状にあった補助をしてほしい ・農地造成補助が出来れば有難い など

田畑の形状の変化や、「山から水が出ない」といった農業用水の不足、さらに居住地変化により、「田が遠くなった」などの具体例が挙げられている。これらの問題は、前にみた営農をやめた理由と重なっている部分が多い。以上の課題に対して、援農の組織化や農業機械の共同化といった“耕作の共同化”の必要性や、さらなる行政からの“補助金や援助”などの対策を求めている。

IV. 仮設住宅での菜園・農園利用

1. 菜園・農園の概要

1) 仮設住宅での暮らしにおける営農

山古志地区のひとたちは営農経験を持つ人が多く、彼らの生活は農の営みを抜きに語るができない。それは、生活の拠点を集落から仮設住宅に移すことを余儀なくされた状況においても同様であった。

ここでは、仮設住宅での暮らしにおける営農の実態について整理する。具体的には、菜園・農園の利用の有無、利用頻度、期間、栽培した品目などの利用の実態と菜園・農園を利用したきっかけ、理由、利用してよかった点、不便に感じた点、といった利用者の意識をまとめる。最後に、菜園・農園の役割についてまと

める。

2) 菜園といきがい健康農園について

既に触れたように、多くの住民が仮設住宅で生活する期間に、仮設住宅敷地内の空地や近隣に旧山古志村から提供された、いきがい健康農園で野菜づくりを行っていた。いきがい健康農園は、住民の要請をきっかけに村全体の転作補填金で整備したものである。【表16】【図1】仮設住宅での暮らしが長期化する中で、営農意欲や体力を維持することを目的に設置された経緯をもっている。以下、本報告では、仮設住宅敷地内の空地に発生した農地を菜園、いきがい健康農園を農園と記している。

表 16 いきがい健康農園の概要

開設期間	平成 17 年 5 月～平成 19 年冬
規模	総面積：4ha 区画数：333 区画 (1 区画＝1a)
年間使用料	1 区画あたり 1000 円 平成 19 年以降：使用料無料化
利用状況 (2 区画合計)	平成 17 年 151 名 240 区画 平成 18 年 168 名 287 区画 平成 19 年 記録なし

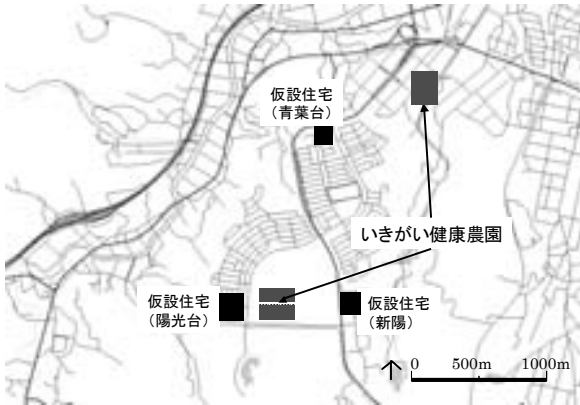


図1 いきがい健康農園の位置

2. 菜園・農園の利用実態

1) 利用世帯

まず、菜園・農園の利用の有無を世帯ごとにまとめた。菜園、または農園を利用していた世帯は112世帯、利用しなかった世帯は143世帯である。【表17】菜園・農園を利用した世帯は全体の半数以下であった。この結果を営農経験の有無と比較すると、営農経験を有する世帯では利用状況はほぼ半数である。営農経験のない世帯もわずかながら菜園・農園を利用していたことがわかる。

表17 菜園・農園の利用と営農経験

菜園・農園の利用状況	営農経験			合計
	あり	なし	不明	
利用していた	91 35.7%	6 2.4%	15 5.9%	112 43.9%
利用しなかった	90 35.3%	29 11.4%	24 9.4%	143 56.1%
総計	181 71.0%	35 13.7%	39 15.3%	255 100.0%

2) 利用した場所

次に、利用した場所についてまとめた。【表18】菜園を利用した世帯が41世帯、農園を利用した世帯が60世帯、その他の場所を利用していた世帯が12世帯であった。複数の場所で農業を行っていた世帯も少なくない。18世帯が“菜園と農園の両方”を利用しており、3世帯が“菜園とその他”を利用していた。

表18 利用した場所

場所	数	割合
菜園	23	20.5%
農園	42	37.5%
その他	9	8.0%
菜園と農園	18	16.1%
菜園とその他	3	2.7%
不明	17	15.2%
合計	112	100.0%

3) 菜園・農園の利用期間と作付け面積

利用していた期間は、菜園については、“1～2年”、“2～3年”利用していた世帯が最も多く、農園については、“1～2年”利用していた世帯が最も多い。【表19】“1～2年”との回答が多いことは、仮設住宅への入居期間と関連しているものと考えられる。

次に世帯ごとの作付面積を整理した。【表20】菜園については、約半数が10㎡以下であり、平均作付面積（30世帯）は22.1㎡であった。農園は1区画100㎡であるが、100㎡未満との回答が21世帯みられる。これは1区画をいくつかの世帯が共同作業していた結果と考えられる。1世帯で2、3区画を耕作している場合もみられる。平均作付面積（42世帯）は106.1㎡と、ほぼ1区画に相当する。

表19：利用した場所と期間

利用期間	菜園	農園	その他	合計
1年未満	7 15.9%	13 21.7%	4 33.3%	24 21.4%
1～2年	16 36.4%	27 45.0%	3 25.0%	46 41.1%
2～3年	16 36.4%	15 25.0%	1 8.3%	32 28.6%
不明	5 11.3%	5 8.3%	4 33.3%	10 8.9%
合計	44 37.3%	60 50.8%	12 10.2%	118 100.0%

表20：菜園と農園における世帯ごとの作付面積

作付面積	菜園	作付面積	農園
1～5㎡	13 29.6%	100㎡未満	18 23.0%
6～10㎡	10 22.7%	100～199㎡	15 16.1%
11～20㎡	1 2.3%	200～299㎡	4 5.1%
21㎡以上	4 9.1%	300㎡	5 27.12%
不明	14 31.8%	不明	18 22.0%
合計	44 37.3%	12 10.7%	118 100.0%

4) 菜園・農園の利用時間・日数

利用頻度については、1日あたりの利用時間と1週間あたりの利用日数を把握した【表21】。1日あたりの利用時間は、“2～3時間”が多い。1週間あたりの利用日数は、“3, 4日”が最も多い。菜園や農園をほぼ毎日(5日以上)利用していた世帯も29世帯と少なくない。

表 21 菜園・農園の利用頻度 (時間・日数)

時間/日	数	割合	日数/週	数	割合
1時間	23	20.5%	1, 2日	15	13.4%
2～3時間	36	32.1%	3, 4日	32	28.6%
4～5時間	11	9.8%	5, 6日	20	17.8%
5時間以上	2	1.8%	毎日	9	8.0%
不明	40	35.7%	不明	36	32.1%
合計	112	100.0%	合計	112	100.0%

5) 菜園・農園での野菜作り

菜園や農園では、主に野菜作りが行われており、その品目は多種多様であった。特になす、きゅうり、トマト、ピーマン、などの栽培が多かった。自給度は作付面積の規模と関連しており、菜園よりも農園を利用していた世帯で高く、さらに複数の場所を利用していた世帯で高くなる傾向にある。【表22】収穫された野菜は自家消費するだけでなく、互いに交換したり、おすそ分けすることもあった。

表 22 菜園・農園での自給割合

自給度	菜園	農園	その他	菜・農	菜・他
100%	2	2	0	2	1
75%	2	13	5	3	0
50%	8	13	1	8	2
25%	6	11	3	4	0
0%	2	0	0	0	0
不明	3	3	0	1	0
合計	23	42	9	18	3

6) 農作業に必要な用具について

農作業の際に必要な用具の調達方法をまとめた【表23】。多くの世帯では、個人で必要なものを購入していたことがわかる。共同購入したケースや仮設内外

の知人から借りるケースもみられるが、稀なケースといえる。特に、種苗、肥料、農薬については個人購入の割合が大きい。農機具については購入との回答が少なく、自宅から持ってきた、との回答がみられた。なお、種苗(なす、トマト、ピーマン、かぼちゃ)については、(株)ひらせいより1人につき各品種5ポット、計20ポットの寄付があった。

表 23 必要な用具の調達方法

用具	買った		借りた		その他
	個人	共同	仮設内	仮設外	
種苗	94	5	8	9	0
肥料	96	4	2	0	1
農薬	79	4	0	0	1
農機具	41	3	3	4	2

3. 菜園・農園利用者の意識

1) 利用のきっかけ

菜園・農園を利用した世帯は112世帯であり、このうち106世帯が利用のきっかけについて回答している。【表24】最も多い回答は、被災以前には“村では野菜などは自分で作っていたから”(89世帯)、というものである。また、“新鮮な野菜を食べたかったから”(67世帯)、“家計費の節約のため”(39世帯)といった回答もまた、被災以前の生活や営農経験に基づいているきっかけと考えられる。一方、“健康維持のため”(64世帯)、“時間をもてあましていたので”(47世帯)、“友人と交流したかったから”(36世帯)、といった回答は、長期に渡る仮設暮らしを耐え抜くために、自らの生活の基本である農業に注目したものといえる。

表 24 菜園・農園を利用したきっかけ

利用のきっかけ	数	割合
村では野菜などは自分で作っていたから	89	79.5%
新鮮な野菜を食べたかったから	67	59.8%
健康維持のため	64	57.1%
家計費の節約のため	39	34.8%
友人に誘われて	14	12.5%
時間を持て余していたので	47	42.0%
友人と交流したかったから	36	32.1%
その他	4	3.6%

2) 利用しなかった理由

菜園・農園を利用しなかった理由については、66世帯の自由回答の内容を整理した。【表25】最も多くみられる理由は、“仕事が忙しいなど時間的な理由から”（26世帯）である。また、“年齢的な理由から”（7世帯）や“体力・健康的な理由から”（4世帯）、“意欲がわかなかつた・余裕がなかった”（5世帯）といった回答がみられる。震災は、少なからずひとびとの営農に対する姿勢や意欲に影響を与えていたといえる。

3) 利用してよかった点

菜園・農園を利用してよかった点について、109世帯の意見をまとめた。【表26】下表にみられるように、菜園・農園の利用は、多様な効用をもたらしたといえる。“健康維持ができた”（79世帯），“食べ物が自給できた”（75世帯），“土に触れられ精神的に安定した”（71）といった回答が多いことから、農園設置は当初の目的を十分に果たした、といえるだろう。一方、最も多かった回答は、“隣人との交流ができた”（80世帯）であった。

表 26 菜園・農園を利用して良かった点

利用して良かった点	数	割合
健康維持ができた	79	70.5%
食べ物の自給ができた	75	67.0%
土に触れられ精神的に安定した	71	63.4%
家族の結束が高まった	15	13.4%
隣人との交流ができた	80	71.4%
家計費の節約になった	44	39.3%
その他	9	8.0%

4) 不便・不都合だった点

菜園・農園を利用して不便・不都合に感じた点をまとめた。【表27】“土質が悪い”、“水利が悪い”といった意見はいずれも過半数を超えている。以上2つの意見は、菜園・農園を利用しなかった世帯も同様に感じていた点であった。一方、“面積が狭すぎた”や“時間が足りなかった”といった、意見もみられるが、これは農業への積極的な姿勢の現われとして、肯定的に捉えることもできよう。

表 25 菜園・農園を利用しなかった理由

利用しなかった理由 (回答数)	具体的な内容
仕事が忙しかったなど 時間的な理由から (26)	・震災で内装業がいそがしかった（65歳／男性） ・勤めがあったので（61歳／女性） ・私、妻ともに働きに出ているので（41歳／男性） ・仕事に就いていたので余裕がなかった（57歳／男性） など
年齢的な理由から (7)	・高齢のため無理（85歳／女性） ・高齢で力仕事無理（77歳／男性） ・年寄りで畑まで歩くのが大変だったから（85歳／女性） ・老人、身体がふじゆうなため（85歳／女性） など
体力・健康的な理由から (4)	・足が弱くなって畑に行けないので（48歳／男性） ・疲れやすい為（23歳／男性）・体力がないからやらない（80歳・男性） など
場所的な理由 (6)	・場所が少し遠かったので行きませんでした。（82歳／男性） ・仮設から離れていて遠かった。歩いて行くのは高齢のため難しかった。（54歳／男性） ・島まで歩いていくのが困難（52歳／男性） など
営農経験がなかったから (6)	・農業をしていないから（65歳／男性） ・農業やってないから（60歳／女性） ・野菜その他を作ったことがないため（72歳／男性） ・もともと畑や田はやってないから（69歳／女性） など
意欲がわかなかつた 余裕がなかった (5)	・その気にならなかった。（63歳／男性） ・気持ちに余裕がなかった（67歳／男性） ・する気がなかった（62歳／男性） ・野菜作りの勇気がなかった（87歳／男性） など
他の場所を利用した (5)	・知り合いの畑を借りたり、自宅に帰った際、家の周りの畑をやったりしていました。（63歳／男性） ・帰村した時に自分の畑を作った。（78歳／男性） ・時々帰宅して自家用野菜は作れたから、通勤農業ができたので（66歳／男性） など
必要性がなかったから (4)	・別に買い物で間に合ったから。（49歳／男性） ・親戚からもらっていた。（53歳／女性） ・1人暮らしでたべられないから（84歳／女性）・作る必要がなかった。（58歳／男性）
その他 (5)	・土地がなかった。（63歳／男性） ・自分の土地でないから（79歳／男性） ・仮設の周りで茄子、きゅうりとまを鉢で植えていた（64歳／男性） など

表 27 不便・不都合だった点

不便・不都合だった点	数	割合
土質が悪い	79	70.5%
水利が悪い	62	55.4%
種苗の手当てに苦労した	10	8.9%
面積が狭すぎた	16	14.3%
耕作する時間が足りなかった	4	3.6%
近隣との関係	2	1.8%
その他	9	8.0%

5) 菜園・農園の役割

最後に、仮設住宅での暮らしにおける菜園・農園の役割についての意見をまとめた。【図2】まず、第一に“農業する喜びを感じた”という意見が最も多くみられる。山古志地区住民は、農作業をすることで、仮設暮らしという特異な状況から一時的に開放され、被災以前の生活を少しでも取り戻したかったのではないだろうか。

“農業をする喜び”は、“つくる喜び”、“食べる喜び”、“見る喜び”といった多様な価値感に基づいている。菜園・農園での体験を通して、山古志地区の住民はあらためて自らの生活における農の営みの重要性を確認したのではないだろうか。また、菜園・農園は“コミュニケーション・交流の場所だった”との意見が多くみられる。具体的には、「そこに行けば必ず誰かがいたので楽しみになった」、「畑に行けばいろいろな人と話をしてもらったり聞かせてあげたり本当に良い場所・・・畑に行くのがたのしみで毎日何回も行ってました」、「できたものを分けたりして楽しかった」といった意見がある。菜園・農園は、単に作物を生産する場ではなく、コミュニケーション・交流の場であり、心の拠り所となっていたのである。菜園・農園は設置当初の意図を越えた役割を果たしていたものと考えられる。

農業をする喜びを感じた

つくる喜びを感じた

- ・自分の前の生活に近づけた。遠くはなれた所に住んだため(59歳 女性)
- ・一生のうちでよそのところで生活するとは思わなかった。長い間山の畑ばかりだったので非常に勉強になった。世の中が広がったというか、いろいろな土質があるのも知ったし、害虫の種類も全然違った。懐かしい思い出になった。(71歳 男性)
- ・畑は近くで歩いていける場所だったので助かりました。面積も自分の希望通りに借りる事が出来たので山古志にいる時と同じ作物を作ることが出来たことは何よりうれしく生きがいでした。庭にはいつでもとって間に合わせられる野菜を作る場所があつてよかったです。(86歳 男性)
- ・土とふれる事は大切な事です。(86歳 女性)
- ・野菜作りなどの畑仕事は山古志の人(特に高齢者)にとっては生活の一部で、なくてはならないものでした。農園を提供していただいて、生活にもハリが出たと思うし、土に触っていられる安心感もあつたと思う。(75歳 男性)
- ・楽しい毎日でした。(77歳 男性)
- ・良い思い出になりました(75歳 女性)
- ・畑を作ってもらって良かった。でも土がわるく石がいっぱいでつくるのに大変だった(68歳 女性)
- ・良かった(68歳 男性) ・よかった。(52歳 女性)
- ・仮設暮らしで畑が出来てよかった(71歳 男性)

つくったものを食べる喜びを感じた

- ・庭に咲く季節の花々。農園の作物。いずれも作ること、育てることの楽しさ、ころの安らぎ、ストレス解消、食することの喜び。(71歳 女性)
- ・農園は毎日手を差し伸べてやればしっかりと答えてくれる。やっではじめて何にも覚えていく。虫が嫌いとか土が嫌いかいいう人は農園は無理です。もつと土にふれることが大事だと思った。自分で作付けたものを口にした時のうまみはスーパーのものとは全く違うということが強くわかります。(56歳 男性)

見る喜びを感じた

- ・農園は野菜作だけでなく、花を植えて楽しんだ人もいます。花は心を豊かにします。私も山古志村の畑に花を植えています。仏花はほとんど買わなくて済みます。冬以外は。(63歳 男性)
- ・プランターで花を楽しみました。現場での仕事が2年も続き、みんなと楽しむことができませんでした(70歳 男性)

生きがいを感じた・暇つぶしになった

- ・年寄りの暇つぶし。いきがいが。(42歳 女性)
- ・狭い施設の中にいるよりも太陽の下でのんびりでき、土にふれることでほっと出来た(53歳 女性)
- ・仕事のない人は土に触れ、精神的にいやすれたと思う。(75歳 女性)
- ・畑の前に少しでも土があると花でも育ててみようかと思う気持ちになれた(44歳 男性)

コミュニケーション・交流の場所だった

- ・友人との交流ができてよかった。作物作りの勉強ができてよかった。(72歳 女性)
- ・仮設は人とのつながりが朝以外にできればオハヨウと大きな声で何人もの人とふれ合いが出来て畑に行けば色々な人と話をしてもらったり聞かせてあげたり本当に良い場所でした。畑に行くのがたのしみで毎日何回も行ってました。私は主人と2人で私は病気がちなので主人が心配に何時もそばでみていてくれました。本当に感謝しています。(79歳 男性)
- ・いやしになる、交流のきっかけになる(49歳 男性)
- ・農園があつたおかげで生きがいが出来た。そこに行けば必ず誰かがいたので楽しみになった。農園がなければ何もすることがなくボケたと思う。(77歳 男性)
- ・仮設にいても、人のことばかり気になって楽しみがないようだった。歩いて1日1回2回でも畑に行くのが楽しかった。石ころだらけだった土質も山古志と違うので思うようにはいかなかったが、ないよりずっとまし。畑は本当に助かった。できたものを分けたりして楽しかった。(80歳 女性)
- ・夫とよく畑方面に散歩に出かけ、キュウリやトマトなどの収穫していたのがだんだん出来なくなり、二人暮らしなので大変なこともあったが、デイサービスやショートステイに連れて行ってもらった後はすぐ畑に行き、ゆっくり畑の手入れをやったり、周りに誰もいない時は大きな声で歌を歌ったり近所の方が行っていれば話ができたして、落ち着いた心の癒しになりました。(77歳 女性)
- ・隣人との交流、生甲斐を感じさせる意味で大変有効だと思う(67歳 女性)

健康・体力面で役立った

- ・水はけが悪く、いつも水溜りのできるような畑だったが、行っているのと気が落ち着く。体を動かすことができよかったと思います。(64歳 女性)
- ・仮設住まいは、体を動かさないので畑で身体を動かすことで健康のため・ストレス解消のためにとてもいいと思うし、経済的にも役立っている。(59歳 女性)
- ・作る喜びと健康的に助かった(86歳 男性)

その他

- ・仮設の庭が狭くて何もつくれなかった(82歳 男性)
- ・通勤農業でいいが山古志で畑作をしたかった。(通行止めで通勤不可能)畑地を利用したかった。(74歳 男性)
- ・年寄りにちよつとつくれる農園があるとうと思います(51歳 男性)
- ・庭などなかった。石がいつもゴロゴロしていた。(85歳 女性)
- ・人の事をとやかく言う人が多かつたから作らずばかだと言われた方が心がいたまない(36歳 男性)
- ・長靴で町中を歩くのにはちよつと(60歳 女性)

図 2 仮設暮らしでの庭・農園の役割

V. おわりに

1. 震災前後の営農状況

調査結果から、山古志地区では営農活動は減少していることがわかった。高齢化や後継者不足などの中山間地域が抱える共通的な課題と共に、震災による農を取り巻く環境の変化が営農活動の減少の要因となっている。特に、地震による田畑への被害は、営農をやめる契機になってしまった。現在、営農を継続している農家でも、高齢化等の課題を強く感じており、対策を講じなければいずれ営農をやめてしまう可能性が高い。一方で、震災後に作付面積を増やす農家もみられ、一概に営農活動が縮小しているわけではない点も明らかになった。一軒あたりの作付面積も増加しており、震災をきっかけに農に関わる営みが変化していることがうかがえる。今後の方向性として挙げられた、耕作の共同化を通じた組織づくり、田畑を含めた環境の維持などが、農業の継続と集落の存続には重要ではあることを示唆している。

2. 仮設住宅での営農の意義

また、仮設暮らしにおける菜園・農園の利用実態から、山古志地区の住民にとって、農の営みは生活の一部であり、決して欠かすことができないことが確認された。帰村後の営農を想定した農園の設置や、自然発生的な菜園での野菜作りは、自然な成り行きであったといえる。菜園・農園で農作業を行うことは、体力や健康を維持するだけでなく、心の癒しや安定をもたらしており、“いきがい健康農園”は文字通り、その役割を果たしてきた。さらに、菜園・農園はコミュニケーションの場となり、収穫された野菜をきっかけにひとびとが交流を深めていたことがわかった。これは、菜園・農園が農という営みを越えた多様な役割を果たしていたことを示している。このような仮設暮らしでの菜園・農園での体験は、農の営みや集落での生活のあり方に変化をもたらしていると思われる。例えば、帰村後に開設された直売所は、仮設住宅の集会所や農園のように、交流・コミュニケー

ションの場として住民たちが足を運ぶ場となっている。このように、帰村後の集落には、新しいコミュニティのあり方が現われているのではないだろうか。

3. 今後の方向性について

山古志地区における農業に関連する問題は、震災復旧時における限定的な課題ではなく、今後も継続的に対策を講じなければならない性質のものである。一方、山古志地区の住民は菜園・農園での体験を通して、互いにコミュニケーションと交流を深め、震災後の仮設暮らしという厳しい状況を耐え抜いてきた。その経験は、耕作の共同化や集落の環境維持といった、新たな課題に取り組むにあたり、少なからぬ影響をもたらすだろう。山古志地区の暮らしには、農業の継続や集落の存続といった課題を前に活路を見出す底力があり、同じ問題を抱えている中山間地域に希望を与えてくれるに違いない。

【参考文献】

- 東洋大学工学部 内田 雄造 (2006) 『山古志復興支援に関する総合研究』
- 東洋大学社会学部 田中 淳 (2006) 『山古志復興プロジェクト－住民調査報告書－』
- 社団法人 北陸建設弘済会 (2005) 『山古志村震災復旧住宅適地選定等調査』
- 山古志復興新ビジョン研究会 (2005) 『山古志復興新ビジョン－住民主導による創造的復興に向けて－』